

アユ「冷水病」 養殖で抑制

「シバチの伝染病予防に
用いる養殖用としてア
ユの冷水病を抑制できるこ
とが、宮崎大の前田昌徳名
誉教授（微生物学）が養殖
会社「あゆの泉館」（日向
市、泉館社長）と共同
で取り組んだ初の実用化実
験で確認された。冷水病は
抜本的な予防がなく、県
内外の各養殖場では毎年数
十ものアユの陸産処分を余
儀なくされている。本格的
な養殖アユの出荷シーズン
を迎え、泉館社長は「薬を

宮崎大名誉教授ら確認

使わずに抑制できること
安全面を「ツールでま
と手応えを深めている。
効果が認められたのは、
前田名誉教授が2007年
ごろに小林市の湧き水から
発見したシエドモナス菌
MS-1株。昨年12月以

安全面アピールへ

県産ブランド化期待

病原菌に対する抑制効果を
研究。07年までには本県と
岐阜県で効果が実証されて
いた。
前田名誉教授によると、
放流した養殖稚魚から天然
アユへの冷水病伝染も指摘
されており、天然アユ減少
の要因の一つと見られる。
養殖アユの品質向上も
期待できる」と見込む。

泉館社長は「安全・安心を
求める消費者にアピールす
ることで、県産養殖アユの
ブランド化につながる」と
期待。
前田名誉教授は民間企業
と連携し、凍結した生菌を
年内にも商品化したい考え
で「耐病性を獲得した稚魚
を川に放流すれば、アユの
資源回復につながる」と
も期待できる」と見込む。



○スーム
冷水病 アユやサケ科の
魚が病原菌に感染すること
で発症。表皮がただれた
り、潰瘍ができたりにして死
ぬ。毎年全国のアユ養殖場
の大半で発生し、自然界で

も確認されている。本県で
は1990年代後半から流
行し始めた。15〜20度の低
水温で発生することから
「冷水病」と呼ばれるが、
近年は25度付近でも感染が
広がるケースが報告されて
いる。

降、同社の養殖アユ約50万
匹に、餌と並べた50匹の
生菌を混ぜて4日のペー
スで与えたところ、例年4
〜5月に発生する冷水病が
今年は一匹も確認されな
かった。遺伝子検査でも異常
は認められなかった。
シエドモナス菌につい
ては、前田名誉教授と県水
産試験場、岐阜県河川環境
研究所が04年から冷水病の

の要因もいわれる。また
ワタシがないため、養殖
場では抗生物質を餌に混ぜ
る、いけすの水温を上げる
などの対応をとってきた。
しかし抗生物質投与後、葉
が抜けるまでの3〜4週間
は出荷できないなど収益面
での影響が大きかった。
15年ほど前から毎年発生
に悩まれ、全体の20%の
出荷を見送ることもあった